九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

教示行為の基盤となる他者の知識・注意状態理解の初期発達

孟, 憲巍

https://doi.org/10.15017/1931676

出版情報：九州大学, 2017, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	孟　憲巍
論　文　名	教示行為の基盤となる他者の知識・注意状態理解の初期発達
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　氏名　橋彌　和秀 副　査　　九州大学　　教授　　氏名　中村　知靖 副　査　　九州大学　　准教授　　氏名　實藤　和佳子 副　査　　九州大学　　准教授　　氏名　藤田　雄飛

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、ヒト社会で見られその種特異性が議論の俎上に上っている累積的文化に不可欠な教示行為の基盤となる社会認知能力およびそれに基づいたコミュニケーション行動の初期発達過程を実証的に検討したものである。教示行為の概念を「意図性」「文化」「機能」のアプローチから整理し、行動生態学的な背景も踏まえつつヒト特有な教示行為の可能性を提示した上で、このプロセスの発達的起源の解明を目指す本研究の学術的な位置づけを明示し「注意関係の一致性に対する理解の初期発達過程」と「他者の知識・注意状態を踏まえた自発的なコミュニケーション行動」との 2 点が明らかになっていないことを指摘した。それを踏まえ、自他間の認識論的一致／不一致に対する行動の初期発達過程を実験的な検討を通じて明らかにしたものである。
本研究がもたらした第一の知見は、他者間の認識論的な差異を第三者的な視点から観察した 1 歳半児が検出し、「行為者」および「観察者である被験者自身」が認識している状況に「気づいていない」であろう他者に自発的な注意を向けることを、視線解析の手法に基づいて明らかにした点である。この傾向は 9 か月児及び 1 歳児では観察されないことから、1 歳半前後頃に出現する傾向であることがあきらかになった。第二の知見は、1 歳半児が自他の注意・知識状態の総意を踏まえた上で指差しによる自発的な情報提供をおこなっていることを実証したことである。統制実験および追加的な分析からも、ここでの指差しが自発的な教示行動と解釈される可能性が示唆された。
　これらの実証的知見をもとに「生後 1 歳半頃から，乳児は注意状態の不一致に対する理解を示し，他者の知識・注意の状態を踏まえた上で自発的なコミュニケーション行動をおこなっていると考えられる」との結論が提示された。これらの結果は乳児が言語習得以前からすでに効果的な学習者であるだけでなく，コミュニケーションにおける柔軟な参加者でもあるという新たな発達観を提示するものである。
　このように本論文は，教示行為におけるヒト特異性を理論的に考察した上で，その基盤となる他者の注意状態の不一致に対する理解，そして他者の知識・注意の状態を踏まえた自発的なコミュニケーション行動の初期発達に関する新たな実証的な知見を提供し、ヒト独自の情報伝達を可能にする教示行為の起源解明に重要な貢献を果たすものであり、博士（心理学）の学位に値するものと認める。